

エンドウつる枯細菌病の伝染源の解明

〔研究のねらい〕

エンドウつる枯細菌病の第一次伝染源は主に種子に起因しますが、発生圃場での伝染方法については明確ではありません。そこで、罹病残渣および雑草での生息状況を調査し、越夏の可能性および伝染源を明らかにします。

〔研究の成果〕

- ①多発圃場に作付け後そのまま放置された残渣上では次作エンドウの生育期の10月～11月においても病原菌が高密度に検出され、伝染源となります（表1）。
- ②エンドウでつる枯細菌病菌が検出されない時期（9月下旬～10月上旬）において、圃場周辺のヨモギより、検出頻度および密度は低いものの、つる枯細菌病菌の存在が確認され、雑草で越夏の可能性があります。
- ③エンドウ圃場内では抑制栽培での秋の発病株から普通栽培への感染が確認されました。
- ④エンドウ発病後はヨモギの他、カラスノエンドウ、シロツメクサ、スズメノテッポウなどで、病原菌が生息しています。

〔成果の活用面・留意点〕

- ①発病残渣からの伝染を防止するため、エンドウ作付け後はそのまま放置せず、耕運などにより残渣の分解を進めます。
- ②普通栽培での多発を防ぐため、抑制栽培の圃場と分離します。
- ③ヨモギやマメ科雑草は、保菌植物となるので圃場周辺の除草を行います。

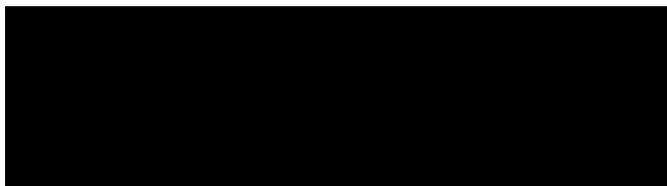


写真 つる枯細菌病菌の生息が確認された雑草（左よりヨモギ、カラスノエンドウ、シロツメクサ）

実施年度：平成13～14年
担当者：増田吉彦